

強気は禁物、はえぬきの穂肥窒素量は2kg/10aが上限 カメムシ類注意報発表！草刈りと適正防除の徹底

平成 15 年 7 月 3 日
やまがたこだわり安心米推進運動本部

1 生育概況

6月30日の農業普及課や農業試験場の調査によれば、平坦部の「はえぬき」は平年に比べ、草丈は長く、茎数はやや少ないが、これは遅発分げつの発生が少ないためである。葉色は低下傾向であるが、まだ平年並みからやや濃い。葉数は平年よりやや多く、生育は平年より1～2日程度進んでいる。中山間・山間部の生育は、草丈は長く、茎数は並みで葉数は多く、平年より2～3日程度生育が進んでいる。直播についても、移植平坦部と同様の傾向で、平年より2～3日程度生育が進んでいる。

土壌中残存アンモニウム態窒素は低下しているが、平年より若干多い傾向である。

なお、農業試験場の幼穂調査によれば、早生品種の出穂期は、平年より2日程度早く、中晩生品種の出穂期は平年並み程度と見込まれる。

2 当面の技術対策

生育は平年よりやや進んでおり、草丈が長く葉色が平年並みからやや濃いことから、品質と食味の高い米（整粒歩合80%以上、玄米タンパク含有率7%未満）を生産するために、適正な m^2 あたりもみ数の確保をめざして、中干しの徹底により生育を調節し、無理のない施肥を基本として、以下の点に留意して当面の技術指導に当たる。

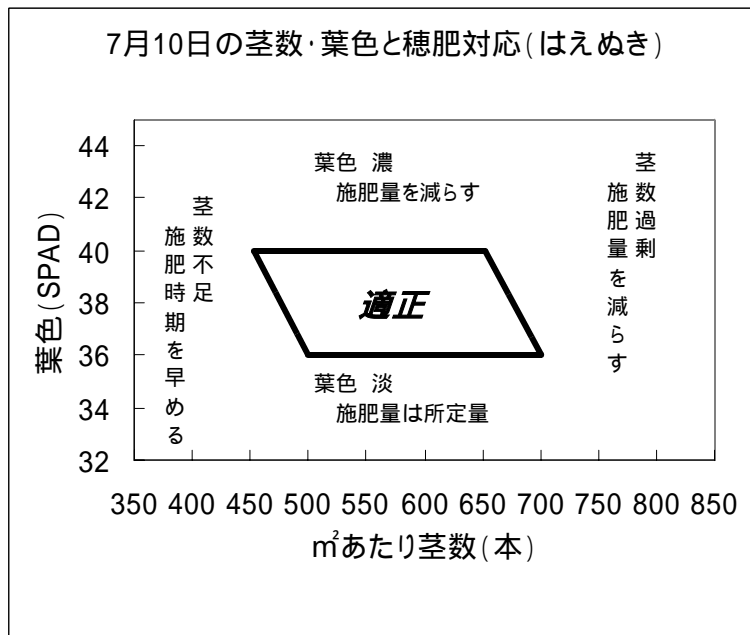
（1）穂肥直前までの中干し実施

草丈が長く葉色が並みからやや濃いことから、7月10日頃まで中干しを確実に実施し、 m^2 あたりもみ数の過剰回避と受光態勢の良化や登熟期間の根の活力向上を図る。まだ実施していない場合は、早急に作溝を実施して中干しの効果を高める。

（2）はえぬきの穂肥は窒素成分2kg/10aが上限

「はえぬき」は、中干しを励行した上で、7月10日に的確に生育診断を行って窒素成分で2kg/10aを上限に穂肥を実施する。特に、生育が旺盛で7月10日の茎数が700本/ m^2 以上、または葉色値40以上と想定されるほ場では、籾数を制御するため、幼穂形成期（出穂前25日）に窒素成分で1.5kg/10aを上限として穂肥を調節する。なお、葉色は低下傾向であるが、平年並み程度となっていることから、つなぎ肥は行わない。

また、「あきたこまち」「ひとめぼれ」「コシヒカリ」「ササニシキ」など倒伏しやすい品種については、現在草丈が長く倒伏が懸念されることから、中干しを徹底するとともに、葉色の低下を確認した後に、生育診断を行って適正に穂肥を実施する。



(3) カメムシ対策等の徹底

7月2日にカメムシ類の注意報が発表された。従って、畦畔・農道等の草刈りを励行し、生息密度の低減を図る。なお、草刈り等雑草対策を徹底できない場合は、遅くとも稲の出穂2週間前(7月15日頃)までに草刈りを終了する。

休耕田については、地域ぐるみで話し合いを行い、草刈りや耕耘などの除草対策を徹底する。

牧草地ではカメムシ類の生息密度が高くなりやすいため、話し合いを進めて、牧草の刈り取り時期の調整や薬剤防除などの被害軽減対策を講じる。

なお、葉いもちに感染しやすい日が続いていることから、箱処理剤で防除を実施した場合でも、この時期の発生には十分注意する。

(4) 直播栽培の管理

「はえぬき」の目標茎数(内陸: 540本/m²、庄内600本/m²)は確保したことから、まだ作溝・中干しを行っていないほ場では急いで作業を行う。10葉期(7/10頃)の適正生育は茎数650本/m²・葉色38程度であり、それより生育が多い場合は、穂肥量を調節する。

いらない農薬は使わない! 使う場合は適正に! 使ったら記帳する!